



Bブロック 全作品と講評



www.columnland.net/

にて作者さん&読者さんの声実況中

カサナラナイ

泣いて、雨宿り…

重ならない

色々あったけど…
信じていたのに…

彼の心は 別の道
彼との想い 重ならない

傘ならない

シトシト降る長雨
ジトジト濡れ眺め

彼の隣は 別の人
彼との相合傘ならない

……この雨はいつあがる？

やがて、雨上がり…

傘ならいらない

少し暑くても

まばゆい光を浴びていたい

彼という太陽

さえぎる日傘ならいらない

路地裏に、一人の少女がいました。

薄汚れた白いワンピースはどこどこ擦り切れていて、靴を履いていない小さな足は傷だらけです。少女はゴミを拾って換金し、なんとか日々を生きていました。

とある少女の恋

ある日雨が降りました。

少女は雨が嫌いです。出歩く人が少ないからゴミも落ちていないし、何より、傘を持っていない少女はびしょ濡れになって寒さに震えるしかないのです。

でもその日はいつもと違いました。

これあげるよ、と、たまたま路地裏を通りがかった青年が傘をくれたのです。少女は怯えながらも傘を受け取りました。その傘は少し、温かい気がしました。

それ以来、青年はよく少女のところへやってくるようになりました。ある日は食べ物を持ってきたり、またある日は靴を持ってきたり。時間があるときにはお話を聞かせてくれたり、文字を教えてくれたりもしました。

最初は戸惑っていた少女ですが、だんだん青年に心を開くようになりました。

ある日雨が降りました。

少女は雨が好きです。雨のおかげで青年と出会えたのですから。

少女は青年に貰った傘をさして大通りを歩いていました。看板の文字を読むことが最近のお気に入りです。そろそろ帰ろうかと思っていたとき、少女は見失いました。

一つの傘に入って幸せそうに寄り添い歩く、大好きな青年と知らない女の人を。

傘に遮られて、青年からは少女が見えませんでした。少女は思わず駆け出し、いつもの路地裏に戻っていました。青年から貰った大切な傘はどこかに落とし、顔は雨と涙でぐしゃぐしゃになっていました。

そのとき少女は、自分が青年に恋していたことに気がつきました。

ある日雨が降りました。

少女は雨が大好きです。少女は路地裏にうずくまって、一人で雨に打たれていました。

夜になって青年がやってきました。少女がびしょ濡れになっているのに驚いて傘を差し出しましたが、少女はそれを受け取りませんでした。青年は自分で傘を持ち、少女もその中に入れて言いました。

約束すつぽかされちゃったよ、と。

それは残念だったわね、と少女は言いました。

暗かったので、青年は少女が笑っているのに気づきませんでした。

いつものように少し話をして、青年は傘を少女に押し付けました。またね、と雨の中を小走りて去って行きます。少女は傘を畳んで脇に起きました。暗かったので、青年は最後まで少女が赤い服を着ていることに気がつきませんでした。

くすくす。うん、またね、と少女は薄く笑いながら呟きました。

そんな少女は、真つ赤な汚れを洗い流してくれる雨が大好きです。

君の笑顔

……また、騙された。呆然と立ち尽くしながら昨日の君の言葉を思い出す。

『明日は――』

やっぱりあれは嘘だったんだね。今のこの状況が何よりよくそれを表している。

これでもう何度目だろうか。もう数えるのも億劫になるほど、僕は君に騙されてきた。いや、僕だけじゃない。世の中の男たちを魅了するその笑顔で、君は一体どれだけの人を騙してきたのだろう。

それでも、気づけば君のもとへと歩を進めている自分がいる。我ながら呆れてしまう。あれだけ騙されても、まだ彼女を信じようというのか。……いや、そうじゃない。何度嘘をつかれようと、またあの笑顔を見ることができれば、それでいいのだ。

家に着いた。タオルで濡れた頭を拭きながらテレビの電源をつける。そこに、毎日欠かさず見ている、僕の大好きな彼女の笑顔があった。

「明日は天気が回復して一日中晴れる見込みです。気温も上がり、7月上旬の陽気になるでしょう」

よし、明日も傘、いらさないな。

鬼の居所

「傘張り佐衛門」と呼ばれる侍がいた。姓は樋口、名は佐衛門。性格は温厚、剣術を能くし、流派皆伝の腕前だったが、公的には無役の徒侍であつたため下付される俸禄だけでは食べて行けず、傘作りの内職を行っていた。

御役目もなく終日家で傘を作つて過ぐす佐衛門を他の侍は蔑んでいたが、彼自身は傘作りが好きであつた。切り出した竹を使つて骨を編み、紙を張り付けて色を塗る。一つ作るのにも手間がかかる仕事だったが、黙々と作り上げる作業は彼にとつて自分自身と対峙しているような気持ちにさせた。実際彼の作る傘は作り手に似て忍耐強く、大らかなようできて力強かつた。

その日も佐衛門は傘を作っていた。巷は、先月現れすでに五人の犠牲者を出した辻斬りのために騒がしかつた。しかしその時の佐衛門には関わりなく、いつものように一日が過ぎようとしたが、夕暮れになつて文が届いた。文を読んだ佐衛門は、夜を待つて外に出た。

新月の晩―人斬りには良い頃合いだつた。

―藩士・北見作次郎を斬れ―

先ほどの文にはそうあつた。藩主直々の命令だつた。辻斬りの咎にて、と北見の罪状が簡潔に書かれていた。藩は藩士の辻斬りを闇に葬るつもりらしい。しかし、なぜ奴が、と佐衛門は不思議だつた。北見は義を重んじる実直な侍として知られており、佐衛門とも面識がある。何かの間違ひではないのか。そう思つた。

あてもなく歩いて行くと、ふいに人影が現れた。はたして、北見作次郎であつた。北見は何も言わずに刀を抜き、八双に構えた。もはや疑いもない。佐衛門は告げる。

「北見作次郎、上意討ちである。神妙に致せ」

北見は答えず、滑るように走つてくる。佐衛門はゆつくりと刀を抜いた。互いに全く無言のままに、ただ一合斬り結んだ。

一刀で作次郎は地面に崩れ落ちた。

あくる日、変わらず佐衛門は傘を作っていた。北見の死は内密に処理され、佐衛門に累が及ぶことはない。斬つたことに後悔はないが、どうも釈然としないことがあつた。義で知られた北見作次郎がなぜ辻斬りとなつたか、である。北見が辻斬りであることは疑いがない。北見と対峙した時、佐衛門はその目に、狂気の色を見た。そう、まるで鬼のような―

聞くところによると、北見の家は先代の不祥事によりに滅石処分を受けていて、謹厳な作次郎は禄を戻すことに奔走した。しかし果たせず、心労が重なるうちに、いつしか魔が差した、ということらしい。そうして義で知られた人間すらも鬼に魅入られ、非情な辻斬りとなつた。誰しも人の心には鬼が潜むと云うのだろうか。だとすると―

―君命のもとに数多く人を斬つてきた拙者はどうなのだろう。もしや、北見と同じように、既に鬼に憑かれた存在なのかもしれない。だとすると拙者の鬼はどこに潜んでいるのだろうか―
そうして佐衛門は、探るように、作りかけの傘をじつと眺めた。

ゆううつアンブレラ

地面にはりつくような雨粒の中、

水玉もようの傘が小さな憂鬱を抱えて

アスファルトを進んでいた。

お母さんは言った。

「水色なんだからがまんして使ってちょうだい」

お姉ちゃんのお下がり、いやだなあ

あじさいが、大きいけれど涼しい顔で

通りすがりの僕をちらりと見る

ねえ、僕のこと、ちよつとばかにしたでしょ

僕はびたびたした真つ白な床とかべと
黒い怪物的治療いすのリングに上った。

あつ、えりちゃん……これは頑張るしかない

背もたれにからだをあずけたら、

あれがきこえはじめた。 きゅいーん

全身にぞわつと緊張がはしる。

はい、おつかれさま。よく頑張ったわね。

このあと三十分はお食事は控えてね。

——うん、よし、涙は流れなかった。上出来だ。

出してみると雨はやんでいた。

水をふくんだ空気が

夕焼けでむっつとしてる。

あじさいの角に来た。

水玉の傘を、あじさいに向かって一気に開く！

ぶわっ！

あじさいの涼しい顔にも、あせた水玉模様ができた。

ばかにするなよ！

雨は止んだのに広がった傘の、はずむ後ろ姿を、

あじさいが水玉の涼しい顔で見送っていた。

精一杯のラブレター

私とあなたは結ばれる運命。そう、ずっと昔から分かっていたのです。

私があなたを意識し始めたのは小学校のいつ頃だったでしょう。当時あなたを怖いと思ひ込んでいた私は、夜あなたのことが頭に浮かぶと必死に布団を被って震えていたものです。

そして、私があなたを愛しく思ひ始めたのが中学の頃。当時私は所謂いじめというものに遭っていました。あの苦しい毎日から私を救い出してくれるのはあなただけ、私は理解しました。

けれど結局、私はあなたに助けを求めなかった。何故でしょう。もしかしたら、私はまだ世界に希望を持っていたのかも知れません。

そして、私は高校に進学しました。そして、うれしい事に私はいじめから抜け出すこ

とに成功しました。これから、楽しい毎日が始まるのだと胸を弾ませたものです。でも、私はそこに楽しさや幸せを見いだすことはできませんでした。そして、私はそういったものを自分が感じているかのように取り繕うのに必死になりました。要するに、人に嫌われないように、いい子であるように私は苦心しました。

でも、もう限界です。私の顔は笑顔を作れないようになってきています。いつかは必ずあなたと結ばれる。けどもう私は待ちません、いや待てないのです。私は自らあなたのもとへ向かいましょう。あなたの温かな懐へ。

あなたのもとへ向かう前、最期に私と、あなたの名前を黒板に相合傘で書いておきましょう。右に私の名前、そして左に愛しいあなたの名前。つまり、死。

私の精一杯の遺書です。
ラブレター

教会で永遠を誓った

薄暗い雲から霧がかった雨が降っている。決して雨粒は大きくはないが、はじめとして長く続くような雨だ。俺は墓の前で立っている。あの日も雨の日だったがもっと激しいものだった。

交通事故だった。雨でスリップした車が歩道に突っ込んできたのだ。あつという間だった。

そして今、俺の妻だった女は墓の前で濡れている。ぐちゃぐちゃに折れた俺の傘を抱えて震えている。

出来ることなら、今すぐ新しい傘を持っで、こいつを雨から守ってやりたい。濡れた顔をタオルで拭いて、何泣いてんだよと笑い飛ばしたい。震える体を抱いて、全てが嘘だったんだよと、優しくささやいてやりたい。

黒い雲が厚くなり雨が激しくなる。雨音に紛れてすすり声をする。俺はこいつのために傘を差すこともできない。涙をすくいあげることも出来ない。抱きしめることも。嘘をつくことも。

いつまでも一緒にいたかった。いられるものだと思っていた。家族で遊ぶ約束なんて簡単に果たせるものだ、何の根拠もなしに思っていた。

いつまでも一緒にいたかった。俺がお前の所へ行けないのなら、お前が俺の所へ来てほしいとすら思う。嫌だ。俺はこいつに生きていてほしい。死ぬな。俺は死んだけども死ぬな。生きて生きて、そして、どうか、俺の分まで、幸せを感じてくれ。

ずっと一緒だって言ったのに。どうして私だけを置いていったの。私たちはこれからだったんでしょ。もっともっと幸せに、なるんでしょ。なるはずだったんでしょ。

お願いだよ。
抱きしめてよ。

帰ってきてよ。

長かった雨は昨日上がった。ねえお母さん。それ、お父さんの傘なんですよ。先に玄関で待っていた娘が不思議そうな顔をした。これからお出かけする約束をしていたのだ。そうよ。お父さんも一緒に行くのよ。

正午になると遠くで教会の鐘の音がした。あの人が家族で行きたがっていた場所だった。雑誌に小さく紹介されていたらしい。丘のてっぺんからは町並みが見下ろせて、心地よい風が吹いていた。蝶を追いかけている娘を除いて人の気配はなく、時が止まったかのように静かで緑にあふれていた。

ふと自然が好きだった人のことを思い出して、時の流れの速さに驚いた。この気持ちをその人に伝えたくて骨の折れた傘を抱きしめた。この子もこんなに大きくなりましたよ。

帰る時になって傘を丘のすみっこにひっそりと埋めた。さよならと言おうとして何度何度も振り返った。

放課後

雨が降る

傘の下、私はあなたと並んで歩く

冷たく濡れた世界の中で

そこだけが暖かい

どうか雨よ

まだやまないで

もうすこし、ここにいさせて

サムライ・チルドレン

昨夜から続いていた雨はあがり、僕たちは傘を杖のようにつきながら通学路を歩いていた。家と同じ方面の子ばかりだが、今日は名前を知らない子ばかりだ。誰も一言もしやべらず歩き続けており、痛いぐらいの緊張が張り詰めていた。

角を曲がって広い路地に出たところで、先頭の子がランドセルを下ろし傘を上段に構える。それを見た後続の僕らも思い思いに傘を構え、互いに少しずつ間を開け硬直する。

一瞬の静寂の後、誰かが叫び声をあげて動き出す。それが戦いの始まりを告げる。

キン！キン！

あちらこちらで傘を切り結ぶ音が鳴り、血飛沫が飛ぶ。

僕も傘を振り上げ、いざ戦いに飛び込むとする、まさにその時。突然僕の背中に衝撃が走った。

背後から不意打ちでの突き―不覚を取った。だが生憎僕はまだランドセルを捨てていない。傘はランドセルを貫いたものの、教科書とノート、そして5枚の下敷きによって阻まれた切っ先が僕の背中に辿り着くことは無かった。

そして振り向きざまに背後に一闪。振り向いた勢いでランドセルから傘が吹っ飛び、得物を失った無防備な相手を傘が切り裂く。この傷ではもう動けないだろう、次の襲撃に備えて辺りを見渡す。そして折りたたみ傘を構える男と目があつた。伸び縮みする性質と遠心力を利用し、変幻自在の太刀筋を見せる折りたたみ傘。強敵だ。

だが折りたたみは一つ致命的な弱点を抱えている。それは傘を開くのにかかる事だ。既に物陰で傘をライフルのように構えるスナイパーに気付いていた僕は、ワンタッチのジャンプ傘を開いて光弾を防ぐ。慌てて折りたたみを開こうとしているが、もう遅い。次の光弾が彼を直撃し爆発を起こす。これで立っているのは僕とスナイパーのみ。

次々と放たれる光弾を防御し、弾数を数える。4発目、5発目、6発目、リロード。その隙を逃さず、お返しとばかり今度はこちらから弾を撃つ。当然向こうも傘を開いてくるが、それは計算の内だ。自らの傘によって視界を遮ったスナイパーに接近する事はいとも容易い。様子見に傘をすばめた所に至近距離からの突きが入り、スナイパーは音もなく崩れ落ちる。

今日はなんとか生き残る事ができた。ほっと一息つくと同時に、血の雨でべとべとになった不快感が襲いかかり思わず顔をしかめる。まったく、これだから雨は嫌いなんだ。



これから擬声語ビームというものを紹介する
なにはともかく実際に使って見せましょう

鱈にうってみよう

タラタラタラタラケチャップたれてきた

餅にうってみよう

モチモチモチモチ赤ちゃんのお肌

すりにうってみよう

スリスリスリスリ猫の顔なで

傘にうってみよう

カサカサカサカサ……

まつまさかこれは……

あ—————

電車で傘を忘れてきた。改札を出ると激しい雨が降りだしたので、仕方なく目についた店でビニール傘を買った。ビニール傘は差したくなかった。人と目を合わすのも少し嫌だったし、視界を下げれば外界と自分を遮断してくれる黒い傘が俺は気に入っていた。

この傾向は最近のもので、信じ切っていた人に裏切られた俺はこじばらくふさぎこんだ態度を取り続けている。嫌いな傘をさしながら、恋愛なんてものはもううんざりだと思った。

今日だけは街で仲良くひとつの傘に入る二人組が視界に入ってしまう。実のところ俺がビニール傘を避ける理由はここにあるのかもしれない。

相合い傘。昔このような可愛らしいまじないが学校で流行ったものだった。まず傘の絵を描き、その下に結び合わせた男女の名を書き込む。誰もがよく友人の名を書いて冷やかしかつたものだ。

——あの落書きを思い出した。あいつは今頃、元気になっているだろうか。傘の下に自分の名前を書いたことは誰にも言っていない。そんなまじないにすぎるしかなかった自分を情けなくも、愛らしくも思った。

本棚に描いたのではなかったかと辛うじて思い出した瞬間、走ってきた女性とぶつかってしまい、転んでしまった相手に自分の落とした傘を差し出しすみませんと謝った。

顔をあげると、あいつの顔が俺をのぞいていた。

向こうの家に傘を忘れてきた。こっちはいまにも降り出しそうな空色だが気にせず故郷の道を歩いていた。

昔住んでいた家で祖母が待っている。父の仕事の関係で向こうに移り住んだが、最近の人間関係にうんざりしてこっちへ帰ることにした。私はこちらの生活で祖母以外の人と関わることは気が引けていた。だが同時に人恋しくもあった。

ふと、急に転校することになってしまったあの学校のことを思い出した。みんなは今頃どうしているのだろう。突然大雨が降り始めたので私は走り出した。街の人を見て学校で流行っていたあのおまじないを思い出した。

——あの人の顔がよぎった。元気にしてほしいと思った。図書室に誰かが冷やかして描いたであろう私たちの相合い傘の先に、ハートの落書きを描き足したことは誰にも言っていない。離れ離れにされてしまう状況を歯がゆく思いながら、そんなおまじないの力を心から信じていた自分を、私は今もまだ捨てきれずにいた。

冷たい雨に打たれながら、なにも行動しなかったことに自責の念を感じた瞬間、前を横切る男性にぶつかってしまい、転んだ自分の体を急いで起き上がらせてすみませんと謝った。

顔をあげると、あの人が私に傘を差し出していた。

——空からは、ビニール傘越しの陽射しが雲の隙間から二人に注がれていた——

漢字に忠実に。

ある雨の日。友達と四人で下校した。しかし傘をもっていたのは一人だけで、仕方なく四人で一本の傘にムリヤリ入り込んだ。周囲の人にクスツと笑われたが、

「傘っていう漢字さ、カサの下に人が四つ入ってるじゃん。むしろウチラの方が正しくね？」

ということでそのまま歩いた。が、傘の面積的にやっぱり雨に濡れる。そこで友達の一人が言った。

「傘って漢字よく見ると、人の上に人があつて、その上にカサがあるじゃん。」

ということだ二人一組になって肩車して、傘に入った。これで傘の面積的になんとか大丈夫。が、キツイ。歩きにくい。そこで友達の一人が言った。

「傘って漢字の、あの横棒はなんだ？ 人が何かに乗ってるんじゃないか？」

ということだスーパーから荷台をバクツてきて、肩車した四人で荷台に乗った。そして通りがかった人を呼び止めて、

「おじさん、すみませんがこの荷台を押してくれませんか？」

「……………君たち、いいから私の車に乗りなさい。」

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	(無題) 大きすぎて	18 pt	2 位	1 sp
		先週の裏表紙「祈り」（作者さん命名）に引き続き、余白に語らせるという、あざやかなアイディアでした。（ただし作者さんは別のかたです。）さびしいなあ。せつなさが歌詞のように語りかけてくるシンプル表紙に、しっとりしたセッションの始まりの予感。半実話？のような作者さんトークでした。なるほどだから、これだけ気持ちが伝わってくるのかと納得してみたり。イメージ図を描いてくれた班までありましたよ。おめでとう、シルバー・メダル!! 特別賞：経験がないで賞（みんな、したことないよ）		
A02	傘の領域	3 pt	8 位	1 sp
		ガチ正統派だね、とT Aさんたち好評価。傘という物体がつくりだす空間の特性について、外界と遮断された「領域」の創出というコンセプトでくっきり切り出して、ゴスロリに相合い傘、比喩もみごとにハマり、論旨の運びが、とてもパワフルで説得的でした。 特別賞：ゴスロリ賞（ゴスロリとはあたらしい） イチオシフレーズ：「ゴシックロリータ（以下ゴスロリ）」		
A03	ただいま四本目	14 pt	3 位	3 sp
		うん、ありそうだね、と苦笑を誘います。タイトルと本文の呼応関係も楽しくてGood。こんなに短いのに、なんだかいろいろつっこみたくなる。それだけ生活感に根ざしてたってことでしょうか。おめでとう、ブロンズ・メダル！ 特別賞：天気予報を見ま賞（お金がもったいないよ！）環境を大切にしま賞（No ego! Yes eco!）天気予報を見てきま賞（me too） イチオシフレーズ：「買ってすぐ止むなよ」× 2		
A04	涙雨	8 pt	4 位	0 sp
		おばあさん！泣けます。特にラストのフレーズ「今日だけは、雨が降っていてよかった」が私にとっては大泣きポイントでした。でも、ずうっと待ってられるって、しあわせかもしれないね。		
A05	(無題) 雨にも負けず	8 pt	4 位	1 sp
		うん、そうだね。日常のひとりごと。堂々と始まって、ヘタレで終わる落差が短いなかに演出できていて良かったです。		

			特別賞：気付かなかった賞（セッション中に一番もり上がった）		
A06	いつもは玄関にいます。		7 pt	6 位	1 sp
			これいいなあ。傘の気持ち。 自分の仕事に誇りを持っていて、でも、使ってくれる人への感謝も忘れずに。 そこのバランスが良くて、しみじみ浸れます。 サウイフ傘二私ハナリタイ……なんてね。 特別賞：傘を大事にしま賞（よく傘は盗られるから）		
A07	日傘		0 pt	10 位	1 sp
			子供の笑顔が太陽、でしょうか。日傘が何だかは、けっきょくよく分からなかったです。大気圏？？解説プリーズ。 病院という死と隣り合わせのはりつめた環境ゆえに、会話のひとつひとつが切実に聞こえてきました。読者に疑問を残さない仕上がりになれば、ぐっと映えると思います。 特別賞：解説して欲しいで賞（分からない） イチオシフレーズ：「クーラーの設定温度は18℃」（五七五）		
A08	五月雨		5 pt	7 位	0 sp
			傘がつなぐ人の温もりを時代劇仕立てで、しっぽりと伝えていただきました。 タイトルもゆかしく決まって、一幅の絵のような。 イチオシフレーズ：「お蜜」「うむ。ところでぬし」×2		
A09	あめふり改		0 pt	10 位	2 sp
			無邪気と油断していると、じわりと恐い、そんな改。童謡って、そんなところがたしかにありますよね。その形をとてうまく使っていただきました。 その恐さ加減、短い時間ではなかなか伝わりにくいけれど、特別賞の班にはちゃんと届いたようですね。 特別賞：深いで賞（とても深い）解説求む賞（よくわからないから教えて） イチオシフレーズ：「ゆこゆこかねがなる」		
A10	（無題） トトロ		0 pt	10 位	1 sp
			で、「あれ」手に入れたら、どうするの、メイちゃん？ 空、飛ぶの？ それとも、「とうもころし」乗っけるのかな？ イチオシフレーズが、みんな全文引用で3班もという珍事つき。 次は既成イメージに頼らない路線をぜひ。 特別賞：と→と→ろおお賞（トトロの名シーンがよく活かされている） イチオシフレーズ：「メイトトロのあれほしい」×3		
			25 pt	1 位	1 sp
			うう、ぎゅうぎゅう。 さすがにどうにかしたい（外見への苦言）。 男と女、大問題。 チャレンジ精神は買うけど、もっと消化してからストーリー化したい。なんだか、むやみと観念を振り回して終わった感（なかみへの苦言）。		

A11	238日後	そして、238の意味は、そんなとこ？ とまあ、苦情をいろいろ言いましたけれど、考え抜かれた設定とそれを形にする文章力、群を抜いてましたね。 めんどーがらずにしっかり読んで評価したフロアのおかげでゴールド・メダルです、おめでとう!! 特別賞：頑張ったで賞（文章長い。想像力豊か。実際、すなおにスゴい。ドラマの「Last Friends」思い出しました） イチオシフレーズ：「俺はホモじゃねえ」
A12	赤坂サカスで傘サガス	2 pt9 位3 sp 読み疲れたら、ラストはお茶漬けサラサラどうぞ。 なんでもないようできて、このリズムとフェイドアウト感、さいこー！ 特別賞：やっつけで賞（右に寄りすぎ、、、）よくあるで賞（たしかにわかる おもしろい目のつけどころ） NON-STYLE賞（エレベーターのネタですね） イチオシフレーズ：「赤坂サカスで傘サガス」×2 「ああ（はあと） 傘がないのか」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	カサナラナイ	0 pt	11 位	1 sp
		リフレインをじょうずに変化させて。 雨、のち、しあわせ。とてもこまやかなつくりの今週の表紙でした。 特別賞：切ないで賞（セツナイ感じが胸キュンする） イチオシフレーズ：「傘ならいらない」		
B02	とある少女の恋	5 pt	5 位	1 sp
		少女、恐すぎ！ 純愛モノかと思いきや……いや、これもひとつの純愛モノ？ 話運びの軽快さに、みごとにダメされました。ぞぞ。 特別賞：戦慄賞（とにかく「こわい」の一言につきる）		
B03	君の笑顔	11 pt	3 位	1 sp
		お天気おねえさん、すてきな笑顔でみんなをダメす。 いや、ダメしてるわけじゃないんだけど、ね。 視点のちょっとした転換で、日常シーンを新鮮に見せていただきました。 明日はきっと晴れるでしょう。 だって、ブロンズ・メダル！だもの。 特別賞：オチ見えすぎ賞 イチオシフレーズ：「よし、明日も傘、いらないな」		
B04	鬼の居所	11 pt	3 位	2 sp
		似合いの文体で、時代設定もぴたりはまって、おめし、なかなかの使い手じゃのう。 新月の晩、人斬りには良い頃合い、なんて、そうそう誰にも書けるフレーズではありません。 藤沢周平テイストと読みましたが、作者さんトークによると池波さんか、なるほど。 おめでとう、ブロンズ・メダル！ 特別賞：班長の独断で賞（班長が決めたから。班長が歴史好きだから） 渋いで賞（読書量多そう）		
		5 pt	5 位	0 sp

B05	ゆううつアンブレラ	かわいい！ 男の子のけなげさが、とびとびの映像と音で、じつにみずみずしく立ち上がってきます。 情景の見せ方のお手本のような。 イチオシフレーズ：「ばかにするなよ！」「きゅいーん」
B06	精一杯のラブレター	4 pt7 位0 sp 死よ、おまえが私の恋人。 いじめ→死、と直結せずに、いじめ→虚無→死とワンクッション入れた工夫のおかげで、人の生の困難さが際立ってきます。 イチオシフレーズ：「私の精一杯の遺書（ラブレター）です。」
B07	教会で永遠を誓った	3 pt9 位0 sp 遺品の傘を丘の片隅に埋めることで、新しい人生への気持ちのリスタートでしょうか。 2つの視点から構成することで、悲しみと、そこからのテイクオフの両方がうまくつかまえています。 気持ちのしっかりこもったドラマでした。
B08	放課後	4 pt7 位2 sp 乙女心の小さな願い。 フォントもフレーズも、とてもきれいにまとまりました。届くといいね。 特別賞：よってるで賞（自分に自信がある）メルト賞（メルトっぽい感じ、東工大生の反感を買いたいんだか、買いたくないんだか）
B09	サムライ・チルドレン	17 pt2 位0 sp ランドセル・ウォーズ。 得物がすべて傘という設定がすてきです。 傘を思い切り振り回したかった、あの頃のやんちゃ気分がみごとに形になった爽快感にブラボー。あざやかなシルバー・メダルでした。おめでとう!! イチオシフレーズ：「変幻自在の太刀筋を見せる折りたたみ傘。強敵だ」×2「4発目、5発目、6発目、リロード」
B10	G	0 pt11 位5 sp 出ました、おなじみG! 言葉が事実を連れてくる。 歌のお兄さん♪子ども向け番組みたいな、はずみ気分がナイスかと思ったら、アダルトな解釈をされた班もあったようで。 ポイントゼロで最多特別賞、ある意味、ネタ師冥利かも。 特別賞：Ganbarima賞（傘をゴキブリにかえる能力に感動!）ハヌマーン賞（タイトルがGということでわくわく読み苦笑。寒気を感じさせるがおもしろい）人類の敵で賞（マジでキライ）Gラブ賞（委員長はGと同棲中。家賃は全額委員長持ちだけど）下ネタで賞（色々連想させてしまうから） イチオシフレーズ：「G」
B11	落書き	3 pt9 位1 sp まさかの偶然を、相合い傘プラスハートマークでつないだ伏線が、ていねいな手仕事感覚で好感。 でも、雨はいつ上がったのでしょうか<ラスト 特別賞：序賞（乙女ゲーのOPっぽいですね。ここからの展開に期待）

			27 pt	1 位	2 sp
	B12	漢字に忠実に。	ばっかだなあ、こいつら4人組。まるでコントのシーンのような。 「傘」という漢字をいじった作品は、今回、山ほどあったのですが、これがもう、圧倒的に圧倒的！でした。世の中ってけっこう楽しいよね。らんらん気分の今週の読み納めです。 おめでとう!!! ゴールド・メダル&イチオシフレーズ大賞！ 特別賞：万引手前で賞（面白い） ノーベル平和賞（こん中で唯一平和） イチオシフレーズ：「……君たち、いいから私の車に乗りなさい。」×5 「肩車した四人で荷台に乗った」		